

6 月の学校便りの巻頭言の内容です。共通理解をお願いいたします。

親の背を見て

「どうもありがとうございました」「お世話になりました」腰が折れるほど頭を下げて、心を込めてお礼を言う母親の姿。これが私の教育の原点です。

まだ園児で 5 歳に満たない頃の私は、その母親の姿を「ある時」に限って、いつも不思議に思っていました。「ある時」とは、買い物をしてお金を払うとき、バスに乗車して目的のバス停で降りるときなどです。普通はお店の方や運転手さんから「ありがとうございます」の言葉があるだけなのに、私の母親は、その後に必ずお礼を言うのでした。「うちのお母さん、不思議だな。なぜお礼を言われた後、お礼を言い返しているのだろう」という素朴な疑問がありました。周りの大人を見ても母親のようなお礼を言う人はほとんどいません。それだけに母親が礼をする度に一種の違和感を覚えました。

小学校に上がった頃には、成長とともに「不思議さ」は感じなくなりました。母親がお礼をするのを見る度になんとも言えない誇らしい感情になりました。小さい頃の記憶はあまりない私ですが、頭を下げる母親の姿とお礼をする時の実際の言葉は、なぜかしらよく覚えています。母親にその理由を聞いたことは一度もありませんでした。

中学 2 年生の頃の話です。「ご多分にもれず」、私も反抗期となり親に反発をする毎日でした。私は言語力が乏しかったせいか親から話しかけられても口を聞かないという反抗の仕方をしていました。父親に声をかけられても全く返事をせず雷を落とされる度に、母親が私をかばいながらいつも言う台詞がこれでした。「お父さんもう許してやってください。ご近所であいさつを良くしている文章（ふみあき）だから。」

2 年ほど前に、子供の頃の素朴な疑問を母親に投げかけました。母親は、「そんなことがあったかのう」と記憶をたどりながら以下のような答えを返してくれました。

「買い物やバスの降車の時のあいさつは、特に理由はなく、当たり前とってしていた」
「物心ついた頃からよくあいさつをしていたかもしれない」
「別に親から教えてもらったわけではないと思う」
「そう言えば、母親が礼儀正しいあいさつをする人だった」

私は、母親に「あいさつをしなさい」と教えられたことは一度もありません。でも、気がついた時には地域の方や目上の方、先生、先輩、上司へのあいさつだけは良く身に付いていて、それが自分の長所となっていました。不器用で要領が悪く決して「世渡り上手」とは言えない私でしたが、あいさつのおかげでずいぶん得をしてきました。教師になることができたのもあいさつのおかげだったかもしれません。

「子供は親の背を見て育つ」。私は、北西小学校にあいさつを根付かせるための一番の方策は「教職員が模範となるあいさつ」であり、「一番の模範にならなくてはならないのが校長である」との理念をもっています。それは、こんな生い立ちから来ているのです。

北町西小は「北西あいさつスタンダード」を合い言葉に地域とも一体となった「あいさつ運動」を進める素晴らしい地域にあります。教師、保護者、地域に限らず、全ての大人が模範となり、学校を起点にしてあいさつが地域全体に広がる町を共にめざしていきましょう。